

『将来の日本』について

菊 地 宏

はじめに

『将来之日本』について『蘇峰自伝』は、△将来の日本の為には如何なる効果を与へた歟を知らざるも、著者たる将来の徳富の為には、鮮からざる便宜を齎した▽というように回想している。その意味は、しかし、他に對する影響又は他からの評価がどうであつたかは別として、すくなくとも自分自身の思想形成にとつてはこの著作は重要な意味をもつものであつた、というのでは全くない。『自伝』が言うのは△世間の評判▽のことであつて思想のことではない。しかも、△『将来之日本』が出た後の徳富が、『ミルトン論』の出た後のマコーレーと、同一程度に世間の評判を博したと云はぬが、正直の処、評判はなかく盛んであつた▽とか、△『将来之日本』が、明治十九年十月出版せらるゝや、初めて予の存在が——尠く共世間の読書子に——

認識せらるゝに至つた▽といった言い方に示されているように、『自伝』の関心はもっぱら世間における自身の△存在▽に向けられていて、『将来之日本』そのものに対する扱いはいささか冷淡であると言わなければならぬ。¹⁾ところが、敗戦後の一般的傾向はこれとは趣きを異にしていて、『将来之日本』は、蘇峰の著作の中では最も多くの関心を集め、また最も高く評価されたものの一つであると言つてさしつかえないであらう。たとえば丸山真男の「明治国家の思想」は、△明治日本の近代国家としての発展過程において凡ゆる変質と墮落が指摘されようとも、その後の時代に比べると、やはり明治全体としてそこに何か根本的な健康性を宿していた▽というテーマを一貫して展開している中で、その△健康性▽を示す代表的な例の一つとして、それも△変質と墮落▽以前の代表例として、『将来之日本』の次の部分を挙げているのである。

吾人は我が皇室の尊榮と安寧とを保ち給はんことを欲し、我國家の隆盛ならんことを欲し、我政府の鞏固ならんことを欲するものなり。之を欲するの至情に至りては、敢て天下人士の後にあらざることを信ず。然れども国民なるものは実に茅屋の中に住する者に存し、此れ此國民にして安寧と自由と幸福とを得ざる時に於ては、國家は一日も存在する能はざるを信ずるなり。而して我茅屋の中に住する人民をして此の恩沢に浴せしむるは、実に我が社会をして生産的の社会たらしめ、其必然の結果たる平民的の社会たらしむるにあらざることを信ずるなり。

こういうのが、丸山によれば、大体当時の蘇峰の立場であつたが、やがて日清戦争を契機に多くの民権論者が民権論と必ずしも必然的関連を持たない様な国権論の主張者となる、つまり帝国主義者に転向して行く中で、蘇峰もまた入まきはこの日清戦争と三国干渉を契機として、従来のような平和主義的な平民主義を捨てて、帝国主義を謳歌するような方向に行き、明治二十年代において、もつとも急進的な自由主義者であつた蘇峰は、明治三十年代においては、もつとも戦闘的な帝国主義者となつた³のである。この変化は、丸山の立場からは蘇峰における入変質と墮落⁴を意味するであろうが、『自伝』はこれについては以下のような弁明をおこなっている。

明治二十七八年戦役は、日本の歴史にとつても、又た予一個の歴史にとつても、孰れも重大事件であつた。而して予が一生にとつては、又たこれが一大回轉機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戦ひたる一人である。……然るに一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、挙国一致清國に衝る事を当面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犠牲とした。世間では此事に就いて、予の事を彼是非難したる人もあつたが、……予自身としては、苟も公人として世に立つからには、大勢に順応して、大勢を率ゐると云ふ事は、当然の事であらうと思ふ。況んや此の二十七八年の役なるものは、予等自らその張本人たるを以て居らざるも、尠くともその急先鋒の一人たる事に於てをやだ。

此の遼東還附が、予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以来、予は精神的に殆ど別人となつた。而してこれと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ、如何なる正義公道も、半文の価値も無いと確信するに至つた。

評価に違いはあるとしても、日清戦争ないし遼東還附を境にした変化を強調している点においては、丸山も『自伝』

も一致していると言っているであろう。そして、この変化を強調する観点に立てば、はじめに見た『将来之日本』に対する『自伝』の扱ひも、△精神的に殆ど別人となつた▽後のものだから当然だというようにすつきりと説明がつくことは確かである。しかし、本当に蘇峰は遼東還附を境に△精神的に殆ど別人となつた▽のであろうか。というより△精神的に殆ど別となつた▽というのはそもそもどういう意味なのであろうか。

右に引用した部分でみずから認めているように、蘇峰は△急先鋒の一人▽として日清戦争に積極的にコミットしていたのであるから、遼東還附は△平和主義▽から△帝国主義▽へという変化の決定的な契機となつたとは言いがたい。⁽⁴⁾そればかりではない、『大日本膨脹論』の△明治二十七年十二月十四日午後十時▽と日付を明記した△序▽において、蘇峰は△巻首の一篇は、本年五月の下旬に稿し、六月初回の『国民之友』に掲けたるもの。固より日清戦争上古史の幕すら、未だ落ちさる当時なりき。著者は実に世人と共に、理想の実行せらるゝの余りに迅速なりしに警嘆せんはあらず▽と先見の明を誇り、その上さらに次のようにみずからの論を性格づけているのである。

爾来事に接し、勢に際し、言ふを禁する能はさる場合に於て言ふもの。漸く積んで全卷を成す。然れとも全卷の意見は、既に巻首の一文の胡桃殻中に収めて、

殆んど余蘊なし。他は皆な類を引き、例に応して、之を演繹したるに過ぎず。……斯書論する所、征清問題に關するもの、十の七八を占む。然れとも征清問題として、大日本の膨脹を論するにあらず。大日本膨脹問題として、征清を論する也。征清ありて、膨脹あるにあらず。膨脹ありて、征清あり。……自から前後本末なくんはあらず。

△前後本末▽がこの通りであるとすれば、蘇峰が△帝国主義を謳歌するような方向▽に向つたのは△日清戦争と三国干渉を契機として▽ではなかつたことになる。そうすると、遼東還附以来△精神的に殆ど別人となつた▽とはどういうことなのか改めて問題になるわけであるが、しかし、『自伝』は他の箇所では、△予の意見を変じたのは、周囲の変化に依つて、変じたものであつて、謂はゞ冬に外套を著け、夏に帷子を著るの類であつて、何等不自然のことは無く、極めて自然と信じてゐる▽と述べ、その上さらに以下のように△根本思想▽の一貫性を強調しているのであるから、こちらに従えば、右のように問うこと自体はじめから意味をなさないということになってしまふであろう。

但だ予の根本思想とも言ふべきものに至つては、恐らくは予の著述を通読せられたる人は、承知であらうが、当初より今日に至るまで、即ち彼是五十年間、恐らくは寸分の狂もあるまいと思ふ。

それは何事である乎と云へば、正しきことを行ふといふことである。……予が自由主義を主張し、藩閥政府に向つて戦つたのも、これが為である。予が帝国主義を主張し、露国に向つて戦ふたのもこれである。……正しきことの為に戦ふといふことは、終始一貫であるが、その戦ふべき対象物は、時と共に異らざるを得ない。これを以つて予が変節などいふことは、全く見当違いにして、予としては到底これを識認することは出来無い。

△精神的▽に△別人▽になるということは、通常の言葉づかいからすれば、衣服を取替えるようなことではなく、むしろ△根本思想▽に関わることであると思われるが、その点に關するかぎり、△彼は五十年間、恐らくは寸分の狂もあるまい▽と蘇峰は明言しているのである。これによれば、△精神的に殆ど別人とな▽るような変化は未だかつてなかったということになり、また、△もつとも急進的な自由主義者▽が△もつとも戦闘的な帝国主義者▽になつたというように変化を強調する捉え方は、△外套▽や△帷子▽のみを見て△根本思想▽に触れることのない皮相な見解でしかないということになるであろう。

しかし、△変節漢▽という非難に対する自己弁護に終始している右の文章をそのまま鵜呑にするのは、もとより考へものである。というより、自分のしてきたことはどれ

もこれもすべて△正しきこと▽であったなどという主張は、それだけで、まともに取り上げるに値しないと考える方が賢明であろう。あるいはむしろ、右の文章から読み取るべきは、ただ何がなんでも自分を正当化しようとする自己中心的感情だけだと言つた方がより適切であるかも知れない。しかし、それならば、△自由主義を主張▽していた時や△帝国主義を主張▽していた時の、その時の蘇峰はどうだったであろうか。右の文章に現われている小児のような自己中心性は、△変質と墮落▽の果ての退行現象にすぎないのであるか。そして、はじめに△健康性▽があつたというのは果して本当であろうか。以下、『将来之日本』についてこうした問題を考へてみたい。

一

『将来之日本』を読んでいてまず感ずるのは、蘇峰にとつていつたい自由民権運動とは何だったのだろうかという疑問である。それほど『将来之日本』には、自由民権運動とその時代をくぐり抜けた形跡が少ない。というより、△緒論▽に△洪水ノ後ニハ洪水アリ▽という表題を与え、△現今ノ所謂日本ナル者▽を△凡ソ人類ノ記憶ニ存スル時代ノ歴史ヲ以テ此ト比較セント欲スルモ。殆ト其比類ヲ尋ヌルニ苦ム程ナル一種奇々怪々悦フ可ク驚ク可キノ時代▽

と呼び、△今日ノ変化ハ退歩ノ変化ニアラス進歩ノ変化ナリ。今日ノ戦場ハ最後ノ戦場ニ非スシテ初陣ノ戦場ナリ。今日ノ門出ハ絶望ノ門出ニアラスシテ希望ノ門出ナリ⁽⁵⁾と語る時、蘇峰は自由民権運動の△希望▽と△絶望▽と△戦場▽そのものを、△維新ノ大改革▽という△洪水▽の中に水没させようとしているようにさえ見える。これは、蘇峰自身がわずか二・三年前、△夫レ今日ノ事ハ政党ノ争鬪ニアラサルナリ官民ノ乖離ナリ則チ日本人民ト日本政府トノ争鬪ナリ一時ノ政略ニ関スルノ議論ニハアラサルナリ即チ政治ノ主義ニ関シ即チ政權ヲシテ人民ニ割与スルト否トノ議論ナリ吾人ハ卑屈ノ平和ニ坐センヨリモ寧ロ自由ノ危キニ立ン事ヲ欲スルナリ⁽⁶⁾と論じていたことを考えれば、不可思議であると言ふべきであろう。

しかし、不可思議なのはこのことだけではない。『自伝』によれば、『将来之日本』は△『第十九世紀日本の青年及其教育』が世の中に受けた為に、それに勇氣を得て、第二の試みとして企て▽られたもので、蘇峰はこれに明治十八年下半期から翌年上半年期にかけて熱心に打ち込んでいる。その打ち込みぶりを『自伝』は、△予の当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽さんと企てたばかりでなく、その覚悟で始め、又たその覚悟で終つた▽とも、△この著述の草稿を三度書き代へた▽とも、△初めは『日本之将来』と題したが、それでは面白くないから『将

来之日本』と改めた▽とも伝えているが、不可思議だといふのは、このようにして一切を傾けて△一個の見識を打ち建て▽た蘇峰が、△而して先づこれを誰に示さん歟と思つたが、誰よりも板垣伯に若くはなしと考へ▽て土佐に赴いていることであり、この時蘇峰のつとめている行動が、明治十五年の夏、岐阜遭難後の板垣を最初に訪問した時と同じパターンをくりかえしていることである。板垣へのこのこだわりは何を意味するのであろうか。

『自伝』によれば、土佐に赴いた蘇峰に対して板垣は△相変らず▽の応待ぶりを示し、またしきりに△同志たるべく促▽したが、△此に於て▽蘇峰は、△書簡を認め▽て△是迄追々御懇情に預り種々御高諭を辱うし▽たことに謝意を表した上で、△然れども畢竟今日迄は一己人の私交を以て斯く御交際を致候得共、唯今よりは政治上の交際に一步を転じ、事宜によりては先生閣下と共に、政治上の運動を共にし、其の進退を同うする訳に立到候儀に候得ば、……念の為め左に一二申上候。是れ畢竟君子永久の交を全うするの道と存候得ばなり▽と大仰に構えて△十条▽なるものを呈示している。しかし、その十カ条は、たとえば△第一、小生は先生を信ずるが如く、先生の同志の方々を信ずる儀には無^レ之……▽△第二、小生将来政治上の運動は全く自動的の運動にて……ある場合に於ては先生と意見を殊にするやを難^レ期……▽△第四、小生不肖天下の志士を以て

自ら任ずるもの……日本の志士として御交際被_レ下度……
△第五、……随意的の挙動を可_レ致……
▽△第六、……自家の性格に不適當なる事は、必ず辞し可_レ申……
▽△第九、小生が先生を尊信するは、固より先生を以て一世の英雄となす故とは申しながら、……万々一其の主義、節操に於て嫌たらざる所あらば、小生は断然先生との關係を失し可_レ申と存居申候……
▽といたたぐいのむき出しの自己主張がほとんどであり、具体性をもった主張は、わずかに△第三、……拙鄙奸悪の手段を致す儀は万々不同意……
▽△第四、……九州の一志士として御交際被_レ下候ては、甚だ迷惑……
▽△第七、小生は即今一書生にして……敢て公然政党杯に加入し候儀は万々御断申上候。……▽という程度のもとの次のものがあるだけと云っていい。

第八、小生が政治上の主義は、今回著述致候『将来之日本』なる一小冊子にて分明と存候。果して此の小冊子通にて不都合なしと御考に成候哉。若し不都合ありとせば如何なる点哉。篤斗御示し可_レ被_レ下候。然る時には再考三考熟考可_レ致候。されども唯今の所にては、先々右の小冊子に記載致候ものを以て、小生将来政治上の主義に御座候故に、生は若し此の小冊子の論点に於て、其の見を同ふする人は、何人にてても政治上の朋友と存じ、同ふせざる人は、何人にてても政治上の敵と存候。先生の高論如何。

△将来政治上の主義▽の中身は『将来之日本』を検討してみなければわからないが、それにしても、自由民権運動に対する『将来之日本』の黙殺と蘇峰がここでとっている行動とはどのように結びつくのであろうか。色川大吉は右の書簡を次のように分析している。

この書簡の発想には、板垣にたいする以前のようない「尊信」はすでにない。あるものは落目の板垣にたいする瀨ぶみ的な儀礼と、前参議・前自由党総理板垣退助にこの書を認めさせ、その推薦を得て自己の立身を有利にしよとする幾分かの期待と、さらにかつて板垣から学びとつたものを今、発展させて、得意然として旧師の前にしめさんとした客気である。蘇峰はかつて福地桜痴に傾倒して、桜痴に失望し、板垣に傾倒して、今や板垣を越えんとしている。蘇峰にとっては権威（「板垣」）からの自己解放なくしては「主体性の確立」もありえなかった。ここに、たしか蘇峰の進歩がある。だが、それと同時に、板垣の世俗的な権威の失墜が、かれの心理に投影していることも見逃すわけにはいかない。それはともあれ、この書簡は、蘇峰の板垣からの独立、豪農民権家としての自立を、鮮明にものがたっている。

蘇峰のねらいと心理は見事にとらえられていると言っている。しかし△自立▽とはこんなことであらうか。色川は

△第二▽△第四▽△第八▽△第九▽の項に示されている自己主張についても△ここには自立した人間蘇峰の躍如たる主体性の主張がある▽と述べているが、△自立▽した人間がどうして今さら板垣を訪問して幼稚な自己主張をする必要があるのだろうか。『自伝』によれば最初の板垣訪問の時の模様は次の如くであるが、右の書簡の△発想▽は、色川が言うのとは逆に、四年前のこの時から少しも△進歩▽していないという点にこそ注目すべきではないだろうか。

当時東京は自由民権論の中心地であつた。板垣伯は自由党総理として、同年四月岐阜に於て刺客の難に罹り、その傷漸く癒えたる時であつて、自由党は恰も旭日昇天の勢をもつてゐた。予の上京は勿論板垣伯に面会する事が、九分九厘迄の目的であつた。……固より田舎の一書生で、一度や二度で逢へる筈はないと、初から覚悟をしてゐた。案の如く板垣伯は面会せず。河野其他の諸氏が面会したが、予は一切諸氏を相手とせず、『予が今回の上京は、諸氏に面会する為でない。唯だ板垣伯に面会せんが為であつて、諸氏には固より何等の用事もないから、此方から面会をお断り申す』と云ひ放つた。

『自伝』によれば、蘇峰にはこの二年前に、『東京日日新聞』の福地源一郎に面会する目的で上京して、△太政官記事印行御用▽の看板を掲げた銀座の日報社と不忍池の端

茅町の福地の自宅の間を、空しく△足駄をガラ／＼踏み鳴し、幾度往復した乎、今は数へ切れぬ程であつた▽という前歴があるが、この時の福地は、西南戦争の際に△一布衣の身を以て謁見仰付けられ、親しく戦況を奏上し▽て以来の蘇峰の英雄であつた。このことが△頭脳に鈔からざる刺戟を与へ▽て、蘇峰は明治十年の初めに新聞記者たらんとする志を確立したのだという。

『自伝』は明治九年の最初の上京についても、△或る写真屋の店頭にて、一枚の写真に、当時有名なる人々の顔を合せ撮りたるものを購ひ、それを熟視し、せめて他日は、其中に伍する様になりたいものと考へた。その写真は今尚ほ蔵してゐる▽と伝えているから、『将来之日本』を携えての板垣訪問は、この野心満々の少年が、有名な人々の顔を合せ撮りした写真に始まって福地を経て板垣に至る英雄遍歴の末に、十年後、今度は自分が英雄となるべく上京するという、いささか出来すぎた立志伝の中の一場面としてふさわしいものと言えようが、しかし、まさにその点に問題がありはしないだろうか。蘇峰の生い立ちからすれば、右に見たような英雄遍歴は、少年期のエピソードとしては特に異とするには当らないし、時の英雄板垣がこの少年にとって自由民権運動そのものであつたとしても、これも格別不思議とも言えないであろう。しかし、この時板垣の前で△某の見込にては到底一義人の血を流さずして改革の行

るゝは夢にも想はぬ所にて候▽と肩肘張っていた十九歳の少年が、四年後に落ち目の板垣に対して、しかも当人が目の前にいるのにことさら書簡を呈示して、相変らず△天下の志士▽を気取って恥じないというのは、精神の発達の仕方としてあまり健全とは言ひ難いのではないだろうか。

△天下の志士▽の書簡が、△右十条果して先生の御意見にて差支なしと御考へ被^レ成候はゞ、生は必ず先生と政治上の交際を可^レ致覚悟に御座候。事少しく面倒の様なれども、将来紛々錯雜の日に於て、如何なる間違あるや不^レ可^レ知……▽とあくまで肩肘張りながら、すべてはこれからようやく始まるかのように語っているのは決して偶然ではない。自分を△天下の志士▽として認めよという以外の何事も主張していない△右十条▽を突きつけられては、さすがの板垣も辟易したことであろうが、ここでお△天下の志士を以て自ら任ずる▽ことに没頭している幼稚な精神は、とりもなおさず、ウェーバーの言う△事柄に即する、という意味での情熱、つまり「^{ザツ}事柄」^ヘ「^{ザツ}仕事」^ヘ「^{ザツ}問題」^ヘ「^{ザツ}対象」^ヘ「^{ザツ}現実」^ヘの情熱的献身▽を欠いた精神に外ならないのである。⁽⁸⁾

二

書簡の第八条は、『将来之日本』に記載されている△小生将来政治上の主義▽に同意しない者は、△何人にてても政

治上の敵と存候▽と気負っているが、この気負いを支えているものは、だから、△豪農民権家としての自立▽でもなければ、△政治上の主義▽の強固さでもない。この大言壮語の背後にあるものは、色川の指摘した△心理▽的な要素を除けば、仕えるべき事柄^{ザツ}を持たない者の無責任さに外ならず、△権威（「板垣」）からの自己解放▽と色川が呼ぶものは、スペンサー等への新たな権威主義的もたれかかりにすぎない。⁽⁹⁾『将来之日本』のモチーフを述べた△緒論▽はそのことをはっきりと示している。引用が長くなるが、文脈を損いたくないのでやむをえない。

過去ノ事ハ以テ論評ス可シ。現今ノ事ハ以テ觀察ス可シ。将来ノ事ニ至リテハ如何ナル達識燭眼ノ人ト雖トモ只推測スルノ一アルハミ。而シテ吾人今日ノ位地ハ之ヲ推測スル事スラ容易ナラス。……然レトモ吾人カ大胆ニモ斯ル重大ナル……問題ニ向ツテ推測ヲ試ミント欲スルハ抑モ故アリ。蓋シ何人ト雖トモ将来ノ日本ハ如何ニナルヘキ乎ノ問題中ニハ。必ス他ノ将来ノ日本ハ如何ニナス可キ乎ノ問題ヲ含蓄セスンハアラス。将来ノ日本ハ如何ニナル可キ乎ハ固ヨリ吾人カ得テ知ル所ニ非ス。然レトモ将来ノ日本ハ如何ニナサル可ラサル乎ノ一問題ニ至テハ吾人亦日本ノ一人民ナリ。平生之ヲ忘レント欲スルモ忘ル、能ハス。恒ニ吾人ヲ刺衝シテ寸時モ止ラス。而シテ吾人ハ今日ニ至リ

テ黙セント欲スルモ黙スル能ハサルヲ感ス。故ニ……直ニ胸臆ヲ擡ヘテ。以テ直言直論セント欲スルモノナリ。

雖然。此ノ二問題ハ互ニ相連帶附着スルモノニシテ決シテ之ヲ分離スル事能ハス。我邦ノ将来ハ如何ニナサル可ラサル乎。吾人カ希望スル所固ヨリ一ニシテ足ラサルナリ。然レトモ其希望ハ果シテ何ニヨリテ生シタルノ希望ナルカ。凡ソ希望ニシテ其価値アルハ唯実行セラル、アレハナリ。若シ然ラスンハ是レ空望ノミ。……社会ニハ社会必然ノ情勢アリ。……若シ夫レ社会ノ情勢ニ抵抗ス可ラサル事ヲ知ラハ。予メ之ニ抵抗ヲ試ミサルノ優レルニ如カス。何トナレハ是レ徒勞ナレハナリ。……故ニ吾人ハ決シテ我邦ノ将来ニ向テ架空ノ希望ヲ懷クモノニアラス。唯将来ニ於テ必ス実行セラル可キ希望ヲ有スルノミ。何ヲカ実行セラル可キ希望ト云フ。曰ク我社会自然ノ情勢ニ従ヒ之ヲ利導セント欲スル是也。即チ我日本ノ将来ハ如何ニナサハル可ラサルカノ経綸ハ。唯日本ノ社会ヲシテ更ニ他ノ干渉スル事ナク。妨害スル事ナクハ将来ノ日本ハ如何ニナル可キ乎ノ推測ヨリ定マルモノナリ。

陸羯南は『将来之日本』を評して、△泰西の語法を以て能く和漢の文字を活用し、一種無類の文格を創成して、本来淡泊無味なるべき所の旨意をば婉曲流麗且つ爽快に記述

し、読者をして巻を解くを忘れしむるものは、将来之日本の筆力なり▽と皮肉っているが、△淡泊無味▽どころか、読み終つてこれほど空しい思いをさせられる文章もそうは無いのではあるまいか。かなしいぐらいに何も無い。蘇峰にとつて自由民権運動とは何であつたのかなどと問うこと自体が愚かしい。△過去ノ事ハ以テ論評ス可シ。現今ノ事ハ以テ觀察ス可シ▽と事も無げに言つてのけるこのエゴチストの心は、本当は、いかなる経験もいかなる△觀察▽も持ち得ないほど外部の世界に対する関心と感受性を欠いているのであり、それ故、△胸臆ヲ擡ヘテ。以テ直言直論▽しようにも、その△胸臆▽には功名心以外のいかなる△希望▽も未だかつて宿つたことがないのである。そうでなければどうして△将来ノ日本ハ如何ニナルヘキ乎ノ問題▽と△将来ノ日本ハ如何ニナス可キ乎ノ問題▽とをこうも易々と△互ニ相連帶附着▽させてすまふことができようか。

陸羯南は『将来之日本』の書評を、△此標題は目今頗る人望ある標題にして、且つ著者其緒論に掲げたる「将来ノ日本ハ如何ニ為サルベカラザル乎」の問題は、世人の尤も注目する所なるが故に、此点に付き余りに短簡なりしは、吾々の大に失望せる所にてありき▽と結んでいるが、本当のところは、△政治上の敵▽という言葉の甲高さとは裏腹に、蘇峰の言う△政治上の主義▽も△希望▽も、『自伝』の△根本思想▽や△正しきこと▽と同じく、中身のな

い容器のような言葉にすぎない。そのからっぽの容器を次のような△推測▽で、といつても△希望▽的△推測▽で、埋めているだけのことなのである。

余ハ強テ生産主義ヲ執ラント欲スルモノニアラス。然レトモ我邦将来情勢ノ赴ク所。勢ヒ如何トモス可ラサルヲ知ルナリ。余ハ単純ナル民主論者ニアラス。然レトモ既ニ生産的ノ境遇トナラハ。我社会ハ一変シテ平民社会トナルハ又タ如何トモナス可ラサルヲ知ルナリ。余ハ如何ナル場合ニ於テモ。如何ナル代価ヲ払フモ。只平和論ヲ唱フルモノニアラス。然レトモ既ニ我カ社会ニシテ平民社会トナラハ。我カ社会ノ運動ハ一転シテ平和主義ノ運動トナルモ亦如何トモナス可ラサルヲ知ルナリ。余ハ固ヨリ日本全体ノ利益ト幸福トヨ目的トシテ議論ヲナスモノナリ。然レトモ其議論ノ標準ナルモノハ唯ターノ茅屋中ニ住スルノ人民是レナリ。何トナレハ苟モ此等ノ人民ノ利益ト幸福トヨ進歩スルヲ得ハ。全体ノ利益ト幸福トヨ進歩スルハ敢テ論ヲ竣タサレハナリ。

これは△茅屋中ニ住スルノ人民▽を△標準▽とした△議論▽ではない。△茅屋中ニ住スルノ人民▽を度外に置かない限り、こういう安易な議論はできるはずはない。蘇峰はこの△緒言▽で、自分は△唯タ忠厚真摯ナル日本ノ一人民トシテ▽問題を論ずるのだと自己紹介しているが、この

△日本ノ一人民▽は、実は、△天下の志士▽の別称であつて、△茅屋ニ住スルノ人民▽とは名称以外の何物も共有してはいないのである。つまり、ここで△生産主義▽と△平民社会▽と△平和主義▽とを△社会必然ノ情勢▽という糸でつないで勝ち誇り顔をしているのは、わずか二・三年前にやはり△矢高フシテ風ニ激スル勢▽に乗じて、△日本人民ト日本政府トノ争鬪▽を鼓吹し、△我邦ノ安危存亡ハ唯廟堂諸公ノ己レヲ屈スルト否トニ存スルナリ▽と威丈高に論じていたのと全く同じ△人民▽なのである。この△人民▽がいま△日本政府トノ争鬪▽を説かないのは、勿論、△廟堂諸公▽が△己レヲ屈▽したからではなく、△風ニ激スル勢▽が終熄したからにすぎない。△争鬪▽すべき問題^{ザツ}が無くなつたのではない。それは、蘇峰に関する限り、初めから無かつたのであり、ついに持つに至らなかつたのである。蘇峰がいまここで、なんのためらいもなく、△日本全体ノ利益ト幸福▽と△人民ノ利益ト幸福▽とを重ね合せて悦に入っているのはそのためである。『将来之日本』が、△茅屋ニ住スルノ人民▽の現実には一言半句も触れることなく、もっぱら△世界ノ大勢▽のみを論じて、あげくに△我国人▽に向つて次のような煽動（というより煽情）を試みているのも、やはりそのためである。

只吾人ハ之ヲ恐ル若シ我国人ニシテ天地ノ大勢ニ従フ事ヲ遲疑セハ彼ノ碧眼紅鬚ノ人種ハ波濤ノ如ク我邦

ニ侵入シ。遂ニ我邦人ヲ海島ニ驅逐シ吾人カ故郷ニハ
アリアン人種ノ赫々タル一大商業国ノ平民社会ヲ見ル
ニ到ラン事ヲ。苟モ之ヲ恐レハ願クハ神速雄斷。維新
大改革ノ猛勢ヲハ百尺竿頭ノ外ニ一転セヨ。吾人若シ
泰西人ノ為ス所ヲ為ス能ハスンハ彼ノ泰西人ハ吾人ニ
代リテ其為ス所ヲ為サント欲ス。此ノ時ニ及ンテ苦言
痛語ノ洛陽少年ヲ追想スルモ豈ニ又夕晩カラスヤ。⁽¹¹⁾

これが『将来之日本』の結びである。△自ら先づ酔う
て、而して後人を酔はしむる▽のが新聞記者の△手際▽だ
と述べたところが『自伝』にはあるが、果して自称△洛陽
少年▽はみずから酔ったか酔わなかったか、これを読んで
酔う△我国人▽はそう滅多にはいないのではあるまいか。
△苦言痛語▽といつても、この△洛陽少年▽の語ったこと
の中身は、これまで見てきたところを少しも出ないのであ
り、その中身に対して、あまりにも空騒ぎの度が過ぎる
のである。具体的にどうせよということが全く何も無い、
ただ△天地ノ大勢ニ従フ事ヲ遲疑▽するなかれというはな
はだ漠としてつかみどころのないことを言うだけにして
は、叫び声のみが不自然に甲高いのであり、いかにも無理
して妄想を掻き立てている風なのである。これが何を意味
するかはもはや言うまでもなく明らかであろう。すでに見
たように、『自伝』は日清戦争の際の行動について△苟も
公人として世に立つからには、大勢に順応して、大勢を率

ると云ふ事は、当然の事であろう▽という奇妙な理屈で
自己弁護しているが、この時は、蘇峰は△公人として世に
立つ▽ために△順応▽し△率ゐる▽べき△大勢▽が是非と
も必要だったのであり、自由民権運動が衰退してしまつた
以上、それは他に求めなければならなかつたのである。ど
こにも見当らなければ、作り出さなければならなかつたの
である。『将来之日本』を産み出し性格づけているのは、
このエゴチストの強烈な立身出世主義に外ならない。すな
わち、鳥谷部春汀は『国民新聞』時代の蘇峰を評して、
△彼。れ。は。政。治。よ。り。も。政。治。家。を。責。び。事。業。よ。り。も。人。物。を。重。し。と。
し。筋書よりも役者に注意す、故に彼れは屢々没論理の文
を舞はずに拘らず、其内奥には英雄崇拜の鈴音鏘々たるを
聞く▽と語っているが、⁽¹²⁾この時は、蘇峰はみずから△英
雄▽たるべく△没論理の文を舞▽わせていたということであ
る。

三

その舞文曲筆の有様をこれ以上詳細にわたってなぞるこ
とには、もはやどれほどの意味もないであろう。△予の当
時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽
さんと企てたばかりでなく、その覚悟で始め、又たその
覚悟で終つたもの▽という『自伝』の記述については、⁽¹³⁾

△抑此将来之日本は、其緒論と結論とを見れば一種の論説文に相違なし。併しながら中間の総論十二回を読むときは一種の記事文にして、短簡なる文明史様のものを讀む心地せり▽△著者は最も古事古説の引用に長じ、且つ之を勉めたるものゝ如く、著述の大半は皆引用を以て成り立つ程に思はるゝなり。其中には間々無用にてはあらぬかと思ふ所あるは、著者思想の満溢と知識の富有とより、覺へず然るものならん。杜甫の詩、神皇正統記、伽羅千代萩、杯は場所柄には左迄要用にあらねど、……此著述の世に厚待せらるゝも、是等幾分か其原料と為るべし▽という羯南の剗切な批評によつてその実態は知られるであろう。△緒論▽と△結論▽はすでに見た。その余は右の如くである。つまり、『自伝』を讀むと若い蘇峰が訪れる名士の数の多さに驚かされるが、周囲の一切を自身の出世の用に供してやまないエゴチストのその厚かましさと虫の良さが『将来之日本』においても發揮されているというだけのことである。最初に見た「明治国家の思想」に引用されている箇所も、そのことを示す代表的な例の一つであると言つていい。それが直前のブライイトからの引用文のほとんど敷写しにすぎないことは一見して明白だが、それはともかくも、その引用文そのものからして、『将来之日本』の国家本位の関心のあり方と議論の運び方から見て、いかにも取つて付けた感じなのである。

先に引いた△緒言▽の文章の前半、すなわち『将来之日本』の論旨を述べた部分に続く後半の部分の唐突さを見ればいい。△生産主義▽と△平民社会▽と△平和主義▽とを△必然▽の糸で結んで悦に入っているその自足ぶりは、△當時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽さんと企てたばかりでなく、その覚悟で始め、又たその覚悟で終つた▽という完結性には照応するであろうが、△茅屋中ニ住スルノ人民▽に対するいかなる関心とも結びつきようが無いのである。蘇峰が△日本全体ノ利益ト幸福▽と△人民ノ利益ト幸福▽とをたやすく重ね合せるのは、みずからを無媒介に国家に一体化させた△天下の志士▽自身を△議論ノ標準▽に置いているからに外ならない。勿論、この△天下の志士▽には△人民▽としての権利の要求も無ければ、日本資本主義の現実が△茅屋中ニ住スルノ人民▽に強いている運命に対する認識も同情も無い。△蓋し冷ややかなる腸はらわた多くして、涙を含める温たかき腸は求むるとも得ず、家なく、食なき茅の家に住民、恨み日に切なり、彼等知らざれば天を恨み、地を罵る、志しある者、少しく戒しむる所あれ▽と語つたのは北村透谷であるが、△冷ややかなる腸▽はわけもなく次のように言つてのけるのである。

吾人は確信す、偉大なる国家を建設せんと欲せば、先づ国民の腔子裏に、一の幸福の念を劊刻せよ。人既

に幸福なるを自覚す、元氣淋漓、山をも排く可く、海をも掀ぐ可し。……人は幸福ならざる可からず、人は幸福なる可き責任を有す。人若し幸福なる能はずんば、是れ自から失墜したる也。天を咎む可からず、人を咎む可からず、是れ自家の罪なり。既に自家の罪なるを醒覚すれば、一躍以て起つ可し。起つとは何ぞ。天を信ず可し、命に安んず可し、職分を行ふ可し、唯だ此の如きのみ。⁽¹⁵⁾

△偉大なる国家を建設せん△がために、△人は幸福なる可き責任を有す△というのである。その国民の幸福が△唯だ此の如きのみ△である以上、蘇峰がやがて△偉大なる国家△のための犠牲として、△我が同胞か戦場に迸らしたる血△と△孤児寡婦か涙△を△神聖なる祭壇に供せしめ△て△以て足れりと為す△に至るとしても、至極当然のなりゆきと言うべきであろう。

もつとも、ここまでくればすでに明らかのように、蘇峰が△我が同胞△の血と涙を犠牲に供してやまない神は、本当は△偉大なる国家△ではない。△神聖なる祭壇△の奥に坐す△偉大なる国家△という御神体の正体は、よく見れば、鏡に写った立身出世主義者蘇峰の影にすぎないのである。△将来ノ日本ハ如何ニナス可キ乎△の△希望△を難なく△将来ノ日本ハ如何ニナル可キ乎△の△推測△に結びつけて怪しまない『将来之日本』の△議論ノ標準△をなしてい

るのは、あくまでもこの立身出世主義者自身であり、蘇峰が△将来ノ日本△にかける△希望△もまた、何がなんでも出世したいという自身の△希望△の投影にすぎない。△我人△に向つて遮二無二△天地ノ大勢ニ従フ事ヲ遲疑△するなかれと叱咤している無責任さを見ればいい。これがすでに不吉な前触れだったのである。『自伝』は、すでに見たように、△一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、挙国一致清国に衝る事を当面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犠牲とした△と述べているが、実際は、蘇峰はこの時すでに△藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ△て叫んでいたのであり、△挙国一致△は『将来之日本』においてすでに理論上は完成されていたのである。日清戦争は、ただそれを心置きなく実践に移す恰好の大義名分を与えてくれたにすぎない。言いかえれば、蘇峰は、自身に関しては、日清戦争に際してその名に価する何物も犠牲に供してはいないのであり、言うところの△凡有る一切のもの△とは、実は、久しい前から季節外れとなっていた△外套△に外ならないのである。

蘇峰が△当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽さんと企てたばかりでなく、その覚悟で始め、又たその覚悟で終つた△というほどに『将来之日本』に打ち込んでいた明治十八・九年といえは、ちょうど透谷

が△世運ノ二字▽に打ちのめされて△全く失望落胆し、遂に脳病の爲めに大に困難するに至り、△全くアンビションの梯子より落ち▽てしまつていた頃であるが、自身の立身出世の△希望▽に駆られて△今日ノ門出ハ絶望ノ門出ニアラスシテ希望ノ門出ナリ▽と語る蘇峰の目には、勿論その△世運ノ二字▽は見えてはいなかつた。『自伝』は、△徳富さんは蒲団の上に成人した仁である。彼人には世間の事が諒解せらるゝ筈がない▽という山路愛山の評を引いて、△自ら不平なき爲めに、他の不平にも頓著しなかつた。自ら不幸なき爲めに、他の不幸にも共鳴しなかつた▽というように自分が△人情盲▽であるゆえんを説明しているが、そういう生い立ちのせいでもあろうか、蘇峰には△弱肉強食ノ状ヲ憂ヒテ、此弊根ヲ掃除スルヲ以テ男子ノ事業ト定メタリキ。然ルニ……世運遂ニ奈何トモスルナキヲ知ル▽という透谷の経験と認識はついに無縁のものであつた。松方財政下の△貧困饑餓に迫るの有様は殆んど全国の下等社会に普ねき▽状況の中で、蘇峰が△国民ナルモノハ実ニ茅屋ノ中ニ住スル者ニ存シ。若シ此国民ニシテ安寧ト幸福トヲ得サル時ニ於テハ国家ハ一日モ存在スル能ハサルヲ信スルナリ。而シテ我カ茅屋ノ中ニ住スル人民ヲシテ此ノ恩沢ニ浴セシムルハ実ニ我カ社会ヲシテ生産的ノ社会タラシメ。其必然ノ結果タル平民的ノ社会タラシムルニアル事ヲ信スルナリ▽と鼻歌でも歌うような気楽さで書くことがで

きたのは、ひとえにその△茅屋ノ中ニ住スル人民▽への無関心と、それ故の資本主義の現実についての無知によるものと言わざるを得ないが、その無知の上に△当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問▽を注ぎ込んで打ち建てられた蘇峰△一個の見識▽は、まさにそれ故に、以後次第に蘇峰にとつてお荷物となつてゆくべきものであつた。

蘇峰には前から実はそういうところがあつた。すなわち、蘇峰がすでに見たように△矢高フシテ風ニ激スル勢▽に乗じて△日本人民ト日本政府トノ争鬪▽を鼓吹していた明治十六年末には、自由民権運動はすではつきりと頽勢にあつたのだが、蘇峰の功名心は△嗚呼政治家ノ大計ハソレ唯社会ノ時勢ヲ察スルニアルカ彼ノ千俗ノ士或ハ曰我邦目今ノ形勢ヲ見ヨ果シテ汝カ云フ如キカ看ヨく民間党ハ去年来ノ勢ニモ似ス影ヲ戢メ氣ヲ息メ一時ニ醉ノ醒メタルカ如キヲ看ヨト嗚呼論者ノ時勢ヲ察セサル如此矣▽というように△目今ノ形勢▽を見誤らせたのであつた。もつとも、変り身の早さも蘇峰の身上の一つであつて、『自伝』によれば、福地源一郎に弟子入りする心積りで上京した際にも、その年の国会開設請願運動の高揚にたちまち感化され、二・三ヵ月後の秋の初めには見るからに壮士らしい風体で渡辺洪基の家に押しかけて議論を吹きかけ、△それはルッソーのコントラ・ソーシャルの受け売りではない乎▽と言われるまでになつてはいるが、この時も、翌年初めには

早くも△目今ノ形成▽を受け入れて△日本政府トノ争鬪▽の鋒を納め、『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』と題して、△吁我が将来ノ政治家ヨ弥耳敦ノ書ヲ握スルモノハ更ニ含伯田ノ劍ヲ提ゲヨ含伯田ノ劍ヲ提グルモノハ更ニ弥耳敦ノ書ヲ握セヨ弥耳敦ノ書含伯田ガ劍ハ実ニ将来ノ改革政治家タルニ必要ナル資格ナルゾ▽と説いているのである。⁽²⁰⁾

四

しかし、蘇峰が△時勢▽を見る目は、所詮功名心にとりつかれたエゴチストのそれではない。植手通有は蘇峰の△「時勢」ないし「大勢」の捉え方の変化▽について、△初期の著作では、時勢を知れという場合に、まず念頭におかれていたのは、日本の時勢であり、それは日本の輿論、より具体的には、民衆の政治意識のあり方にほかならなかつた。……これにたいして、『第十九世紀日本ノ青年及其教育』以後になると、時勢を知れという場合、真先きに強調されるのは、「世界の大勢」を把握することである。……ここでは、「世界の大勢」とは、それへの順応が当然とされるものである。したがって、それは、よいもの、正しいものでなければならぬ。かりにそうでなくても、最低限それは一義的で明確なものであり、あいまいなものであつ

てはならない。一義的でなければ、順応の目標、ないし規準とはなりえないからである。……こうして、「世界の大勢」の必然性とそれへの順応を強調する蘇峰は、世界状況にたいして一面的になり、自己欺瞞に陥ることを必然化される。この自己欺瞞は、やがて彼に転向を不可避とすることになる▽とすぐれた指摘をおこなっているが、⁽²¹⁾しかしこれでは因果のとらえ方が逆であろう。植手はこの変化に關連して、△こうした「世界の大勢」へのよりかかりと日本の将来にたいする明るい展望は、一面からみれば、自由民権運動の敗北にもめげずに、……あるいは政治的に無關心な「冷笑的」態度に陥ったり、あるいは現状に埋没した卑俗な立身出世主義に陥ったりした青年を励まし、彼らに現状変革的な態度を持続させることを狙いとしている。しかし、他面から見ると、……日本の現実と真向から取組み、全面的にそれと対決しようとする姿勢が、すでに大きく後退している▽と述べて、ここでも△他面▽についての指摘はすぐれたものとなっているが、他の一面については信じ難いほど不均合いにナイーヴで好意的なのである。それにしても、△日本の現実と真向から取組み、全面的にそれと対決しようとする姿勢▽に欠ける者が、他人を△励まし、彼らに現状変革的な態度を持続させることを狙▽うというのは、考えてみれば奇妙なことではないだろうか。植手は、『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』の中で△そのいわ

ゆる「改革政治家」に必要な資格が、「ミルトンの書とハムプデンの剣」によつて象徴させられていることVに代表されるような傾向、すなわち、西洋の事例の引照がきわめて頻繁で、しかも入もつとも重要な説明ないし主張が、西洋の事例によつてなされるVのような傾向について、△こうした傾向は、蘇峰の全面的欧化主義の立場と関連するが、その場合、西洋の概念ではなくて事例が頻用され、いわば未知なる事例によつて、一定の意味内容が説明、ないし主張される点に問題があるVと、ここでもきわめて適切な問題点の指摘をおこない、更に、現在でも残っているそうした傾向に対して、△浅薄な「文明開化」的態度は、もう脱却しようではないかVと呼びかけているが、蘇峰に対するそのナイーブな態度の中にもなお幾分か△文明開化V的な要素が残つてはいないであろうか。おそらく蘇峰は、丸山の次のような説明が最も説得力を發揮するケースの一つなのである。

日本の進化（＝欧化）と立身出世主義とはいろいろな意味でパラレルな関係にある。田舎書生の「進化」の目標は、まさに「日本の中の西洋」である東京に出て大臣大将への「段階」を上昇することにあつた。欧化は日本の「立身出世」であり、立身出世は書生の「欧化」である。……日本の「進歩」の価値規準がヨーロッパの歴史的段階の先後に一元化されるとすれ

ば、「えらい」人の規準は官僚制の階層の高下に一元化する。日本の驚異的進歩が「脱亜」いや進んでアジア大陸の「停滞性」を尻目につけて、むしろ踏みつけながら行われたように、秀才の出世は「むら」からの（……）脱出であつて、福沢がつとに太閤秀吉の「出世」を例にひいて指摘したように、「譬へば土地の卑湿を避けて高燥の地に移りたるが如し、一身のために都合宜しかる可しと雖ども元と其湿地に自から土を盛て高燥の地位を作りたるに非ず、故に湿地は旧の湿地にして……」（『文明論之概略』）という反面をもつていた。

立身出世の道は、しかし、官僚制の△段階Vを上昇することだけとは限らない。生い立ちのせいで△如何なる場合でも、世間並の待遇を受けては、何やら物足らぬ感が出る。自分だけは何時もお山の大将で居なければ、満足が出来ない様な感がするVという蘇峰が選んだのは、すでに見たように、△一布衣の身を以て謁見仰付けられVた福地源一郎を目標とする道であつた。『自伝』によれば、『将来之日本』の出版の目途がついたある日、蘇峰は秘書格の人見一太郎に次のように△胸中の秘策Vを打ち明けている。

予等は長く田舎に老ゆべき者ではない。中原に出て角逐すべき時期は、正に到来せんとしつゝある。それで君は今より直に帰つて熊本の同志に告げ、速かに大

江義塾の閉校を計らはれ度し。若し諸友が異存あらば、火をつけて塾を焼いても差支へはない。……予は暫く東京に止つて、愈々旗挙げの準備をなし、然る後帰郷する事とする。

こうした事情について、慧眼な鳥谷部春汀はつとに、
△蘇峰の舞台に出づる、予告あり、筋書あり、道具立あり▽
と評しているが、この春汀の、△凡そ最も世の同情を博し易き議論は、弱者少者に与みするの議論なり。蘇峰は善く此秘訣を知る。故に筆を揮へば輒ち曰く、吾人は青年の友なり、婦人の友なり、平民の友なり、……▽という指摘と、『自伝』の次のような解説を加味すれば、蘇峰の△進歩▽主義の理解はより十全に近づくことができるであろう。

明治三年八歳にして熊本に出たが、……吾々は在郷の者と唱へられてをり、且つ第二には士族と然からざる者との区別が甚しかった。……普通の子供心ならば、……在郷の者と云はれ様が、輕輩と云はれ様が、予の父は熊本藩の役人として、尠く其中以上にあり、藩知事の御覚えも、最も目出度き一人であつたからして、それ等のことを彼是念頭にかくる必要も、無つたであらう。

然るに如何なる訳か、侍などと云ふ言葉が頗る癪に障り、それ等の考が何時の間にか予に所謂の平民主義なるものを、湧出さす様になつたのではあるまいか

と思ふ。それから熊本にて各所の学校や、私塾に赴いたが、何時も其処では長幼の序を正し、年少者たるの故に、常に自分は損をしてゐる様な心地がし、自ら年の不足なるを呪ふたことが屢々あつた。

△生れ落て以来、一家に於て特別待遇を享▽け△日々交るところのものは、概ね父の門下生の類▽で、さらに△何れの学校でも概して、別段▽に近い待遇を受けるといふ境遇にあつて、しかも父親の父性が弱かつたといふ事情が、右に見るような△普通の子供▽とはかけ離れたエゴチストを育て上げたようであるが、そのことと、立身出世が父親の代から、それもそこですでに欧化主義と結びついて始まつていることを思えば、蘇峰の強烈で特異な立身出世主義も、△全面的欧化主義▽も△平民主義▽も△明治ノ青年▽の自己主張も、エゴチストの自己主張のあり方としてはきわめて自然なものであると言えないこともない。しかし、結局それだけのことである。すなわち、蘇峰はついに我の強い子供の段階から脱却しなかつたのであり、従つて、その諸々の言葉は、その時々△大勢▽に依じて選ばれて蘇峰の自己中心的な感情を仮託されるだけであつて、通常期待されるような社会性、すなわち意味はそこには含まれてはいないのである。蘇峰の議論が、『将来之日本』においても『大日本膨脹論』においても、そもそも初めから説き起すというスタイルをとっているのも、その議論が△没

論理の文を舞はずVのも、だから少しも偶然ではないのである。

丸山は△学部学生の演習で、初期の徳富蘇峰の報告を担当したひとりの学生にたいして、私は、初めて原史料を読んだときの素朴な印象を聞かせてほしいと言ったところ、彼は「とにかくすごいエネルギーがありますね」と感に堪えないという調子で答えたVというエピソードを解説して、△学生運動からテレビのコマーシャルにいたるまで、闘志とちからを強調し、謳歌するキャッチ・フレーズが氾濫している空気のなかで育ったこの学生が、予備知識も先入見もなしに「国民之友」などの史料に接して、文章の燃焼力に新鮮なおどろきを感じたということ自体が、はしなくも現代の逆説をものがたってはいないだろうか。つまり、右のような言葉の氾濫はかえって実質への渇きを象徴しており、現代人において内面からの精神の燃焼力が衰弱していることへの漠とした不安と焦だちが逆に外面的なエネルギーの誇示や強調となつてあらわれているとみられな⁽²⁵⁾いこともないVと述べているが、『日本の思想』において△日本的「自愛」Vや△色々な「思想」が歴史的に構造化されないようなそういう「構造」Vについてみずから鋭い問題提起を行ないながら、初期の蘇峰についてはどうしてこのようにナイーヴなのであるうか。△言葉の氾濫Vが△実質Vの不在を象徴するという△逆説Vは、蘇峰におい

てこそ最も鋭く現れているのであり、蘇峰の場合には、ただ、△内面からの精神の燃焼力Vの不在が、乗ずべき国内の運動が衰退していることに対する立身出世主義者としての不安や焦だちと結びついて、△世界ノ大勢Vや、△天保ノ老人Vに対する△明治ノ青年Vの、誇示や強調となつて現れているというだけのことなのである。

五

しかし、功名心にとりつかれたエゴチストの目には、結局△時勢Vは見えなかつたのである。丸山は右に続く文章の中で、△幕末から自由民権にいたる疾風怒濤の「非常時」がようやく終息しようとするとき、「新日本」の新たな担い手は、もはや東奔西走の志士でも衣は胼に至る壮士でもなく、いわんや「維新の元勳」でもなく、日常的な生活と生産の場から政治、経済、教育、文化の諸領域に国民的な創造を担当する「自活自営の民」でなければならなかつた。こうした新たな社会層と人間像を自主的に創出しようという旺盛な意欲Vが△さきの学生が直感した文章のエネルギーVとなつて現れているのだと述べているが、これは、蘇峰の△意欲Vそのものと同じく、全くの見当違いであると言わなければならない。

明治十八年八月十二日といえばちょうど蘇峰が『将来之

日本』の草稿の執筆にとりかかったかどうかという頃である。『朝野新聞』はこの日から三回にわたって「地方農民窮迫の実情打診」という見出しの注目すべき記事を連載している。それは、△左の一篇は近江国滋賀郡の篤志家田中某より寄送せしものにて、聊か民間の事情を知るに足れば、掲げて以て読者の瀏覽に供す▽と紹介されているから、文字通りの意味で△日常的な生活と生産の場から▽寄せられた、実在の△自活自営の民▽の声である。当時崩壊のしつつあったその豪農という△社会層と人間像▽を代表するこの篤志家は、△一昨年来の不景気にて農商工とも一般に困難を極め、今は不景氣の区域を通過して飢饉の境に陥りたるが如き有様に立至り、……余の如きは浅学不才にして別に考案もあらざれば、實際見聞する所の事実と、維新前の状況とを比較し、有志の参考迄に聊か左に開陳せむ▽と前置きして、△近来農家の非常に困難に陥りし▽実情を詳細に報告している。その一端をここに示しておきたい。

一町より一町四五反持の自作者の生計の有様を陳べむに、一町の地価金を六百円とせば、此収穫米は六十俵に過ぎざるべし、此内飯料に三十俵と、神社寺学校等の出し米二俵とを引去り残り廿八俵を一俵一円八十錢の相場にて売却せば此金五十円四十錢となるべし、然るに此金額の内より更に肥料六駄の代金三十九円と地税、地方税、村費廿七円、外に耕手の給金八円、農

具修繕費二円を差引かざるべからざるに、其額は総計七十六円の多きに上れば、之を五十円四十錢の内より引くときは二十六円の不足を生ずべし、是を以て家族は山稼ぎ日雇等に出で其不足を補へど……農間稼ぎにて補ふは到底なし難き所なるより、田畑を引当に借金するあり又は売却するありて其極遂に今日の如き情況に至りたるなり、……見よ一昨年は早魃の爲めに六七分も収穫を減じ、昨年より今年に掛けては水害ありて八九分も無用に属せむとするに至りしにあらざるや左れば今日に在ては飯米に差支る者多くして其粗種を買入るゝ事も出来ざる始末なるに、地券面に記載ある丈けの地租は必ず上納せざるを得ざるを以て、金融の爲めに質入せむとするも、質取主は斯る利益なき田地の若し流質となるに至らば其迷惑少なからず、……地券証⁽²⁶⁾にては少しの金額をも融通し得ざるに至れり、

この篤志家は△願て維新以前の有様を見れば、圧制の事は種々ありしも田畑税は……▽とやはり詳細な検討を試みた上で、地租改正以後の税負担が、とくに米価の下落した明治十四年以降、農民にとって過重になっていることを訴えているが、その過重な税負担が△自活自営の民▽を放逐しつつある現場の有様は、たとえば次のようなものであった。

後半期の地方税徴収期限を経過すれども未納の夥し

きより、区内各戸長役場にて其公売処分を施行すべき名簿を調査ありしに、一部内にて多きは三百戸少きも七八十戸を下らず、全区中にて千戸以上の戸数に及ぶ程なれば、全区の総戸数八千余に比すれば一割以上に当る。

△嗚呼本邦ノ中央盲目ノ輩ニ向ツテ、咄々又々何ヲカ説カンヤ。兎ノ胸中独り自ラ企ツル所、指ヲ屈スルニ暇アラズ▽と透谷が述べるのは、みずから三多摩地方の農村をめぐり歩いて得た觀察に基づいてであるが、ここに紹介したのは、『東京經濟雜誌』が明治十七年の熊本について報じた記事である。⁽²⁸⁾つまり、熊本について△“Nation”と云ふ週刊雜誌、及び田口鼎軒氏の『東京經濟雜誌』、中江兆民氏の『政理叢談』、矢野文雄氏の著作『経国美談』等▽を最も愛読したという『自伝』の書きぶりからして、普通なら、蘇峰が当然読んでいるだろうと考えられるものである。先に見た新聞記事もその点であまり変りはない。新聞記者志望の蘇峰は、△『学問の目的』と題し、『第一史学、第二章学、第三経済学、右の通りに相定め候也。一切無用の読書を禁ず。詩歌は性情を養ふものなれば時々披見して可なり。新聞は時勢を達観するの具なれば時々読むべし』と記し▽たものを机辺に掲げて△学問の方針▽としたというから、右の記事にも少なくとも一瞥ぐらいはくれていたはずだと想像する方がむしろ自然であろう。

ところが、蘇峰が△時勢を達観▽する仕方では、乗ずべき△世界ノ大勢▽は見えても、△日常的な生活と生産の場▽に関するどのような記事も目にとまらなかつたということであろう、蘇峰にはどちらも読んだ形跡はないのである。もつとも、読んだかどうかということは本当は問題ではない。蘇峰は、自分自身が豪農の長男として熊本の農村で暮らしていたのだから、少しでも△日常的な生活と生産の場▽に関心を向けていたなら、活字を読むまでもなく一切は自分の肉眼で見ることができたはずだからである。少なくとも、△茅屋ノ中ニ住スル者▽の境遇に同情する心がほんのわずかでもあつたならば、『将来之日本』において次のように文を舞わすことは決してできなかつたはずだからである。

人ノ恒ニ知ラント欲スル所ノモノ将来ヨリ甚敷モノ
ハアラサル可シ。而シテ殊ニ我日本ノ将来ヨリ甚敷モノ
ノハアラス。何トナレハ現今ノ所謂日本ナル者ハノア
ノ兒孫カ芳草萋々タルベールノ原野ニ於テ天ニ達セ
ントスルノ石塔ヲ築カント企テタル上古ノ文明ヨリ。
北狄蛮人ノ継続者カ鉄ト電氣トヲ以テ殆ント地球上ノ
表面ヲ一新スル近時ノ文明ニ至ル迄。凡ソ人類ノ記憶
ニ存スル時代ノ歴史ヲ以テ此ト比較セント欲スルモ。
殆ト其比類ヲ尋ヌルニ苦ム程ナル一種奇々怪々悦フ可
ク驚ク可キノ時代ナレハ也。

△無用の読書▽をみずからに禁じて△史学▽と△文章学▽に励んだ成果がこれである。これで残る△経済学▽が少しでもましならまだしも救いはあるが、蘇峰にあるのは、△武備ノ世界▽すなわち△封建社会▽とは△二種ノ階級アリテ一ハ唯消費者ニシテ。一ハ只生産者▽であるような社会であり、そこでは△消費者ハ徹頭徹尾。唯愉快ニ安楽ニ貨物ヲ再生ノ見込ナキ地ニ向テ消費スルノミニシテ。生産者ハ徹頭徹尾。唯終生骨ヲ折リ。汗ヲ流シテ生産ノ業ニ従事スルノミ▽であるのに対して、△生産主義▽の社会すなわち△平民社会▽は、△全国全社会全人民ヲ挙テ皆一ノ生産者トナシ。消費者トナシ。何人ニテモ生産者タルモノハ必ス亦タ消費者タル可シ。消費者タル者ハ必ス亦タ生産者タラサル可ラス。而シテ其ノ消費スル額ノ多少ハ必ス其生産ノ多少ニ平均シ。……原因結果ノ關係ハ至密ニ行ハレ。其ノ勤勉シテ富ヲ生スルモノハ葡萄ノ美酒。……其怠惰ニシテ放逸ナルモノハ悪衣悪食⁽²⁹⁾であるような社会であるといった具合の、情無くなる程単純な図式だけなのである。これに、△貿易ノ法則ハ彼我ノ利益ヲ並立セシムルニアリ。貿易ノ法則ハ即チ人情ノ法則ナリ。宗教ノ法則ナリ。愛情ノ法則ナリト云フ万古ノ真理ヲ叫破シ。而シテ殆ント俗耳ヲ聳動スルカ如ク明暢ニ叫破シタルハ実ニアタムスミス其人ニシテ此法則ヲハ実行セシムルノ作用ヲ発明シタルハゼームスワット其人ナリト云ハサル可ラス▽という

たぐいの虚仮威しを加えてみても、その△経済学▽の貧困は覆えるものではないであろう。ところが、丸山の言う△新たな社会層と人間像を自主的に創出しようという旺盛な意欲▽を支えているのは、外ならぬこの貧困な△経済学▽だけなのである。もっとはっきり言えば、日本資本主義の現実が、すぐ目の前で、理不尽にも△自活自営の民▽を急速に没落に追い込んでいたちようどその時に、こともあろうに、△生産主義▽の法則は△人情の法則▽だの△愛情の法則▽だのと寝言を並べていた、その人並みはずれた△人情旨▽の頭に浮んだ白日夢がその△意欲▽の正体なのである。

六

それにしても、蘇峰のこの虚妄の△意欲▽に対して今日寄せられている共感は、いったいどのように理解すべきものであろうか。たとえば松本三之介は、明治二七年四月の『国民之友』の論説「平民的進歩主義と国民的精神」の中の△それ国民的精神の眼中には、国民ありて、華族なし、士族なし、平民なし。果して然らば、国民的精神は、平民主義を予想するものにあらずや。それ国民と共に国家を経営す。国民的運動は、即ち平民主義の示現のみ▽⁽³⁰⁾という文章をとり上げて次のように論じているのである。

この平民主義と国民主義との融合は、一見、平民主義の自然の発展と見えながら、実は見のがすことのできない転換の因子を含んでいた。なぜなら彼の平民主義は、もともと、従来の政治の姿勢が外むき（「外部の必要」）であつたのを、正しく内なる社会の現実と向き合わせ、国家のあり方を「外交の必要」ではなくて、平民の生活社会と結びつけようとするところから出発していた。ところが国民主義との結合は、……かつて「平民」主義なるがゆえに「貴族」主義や、「士族」主義と自己を区別し、それらと対決しえた対内的意味を全く失わせ、外国にたいしてはまさに等質な「国民」にすべてを解消してしまつたからである。だから彼の場合、みずから考えたように、「国民的精神」は平民主義を予想するもの^①では決してなかつた。このような蘇峰における微妙な発想の変化は、やがて日清戦争を契機に、平民主義から国家主義へと「転向」を遂げる先ぶれともなるのである。

ところが、△平民主義∨の△対内的意味∨は、国木田独歩の見たところでは、もともとはなはだ△とりとめなき∨ものだったのである。次に引用するのは明治二五年十月『青年文学』に載つた文章である。^②

国民之友は今日迄六ヶ年八ヶ月の齢を積み、……『平民主義』々々々々も最早や久しき者とはなりぬ。

去り乍ら平民主義を除ひては、其所に民友記者なし。……夫れ平民主義の反対の標幟は則ち貴族主義なり。然れ雖、今日に在りて誰れありて吾こそ貴族主義なりと名乗り出ざる者あらんや。故に標幟上已に平民主義の向ふ処敵なきなり。……思ふに平民主義なる標幟の漠然たる亦た茲にある可し。……平民主義とは何ぞや。其の定義を与へよと言はるゝ時は、平民主義賛成の人も其の答に惑はん。恐くは民友記者自身と雖、其定義と云ふに至りては明言し能はざる可しと信す。……蓋し平民主義とは只た人民の友と云ふ主義なる乎。自由主義豈に人民の敵ならんや。然らば平民主義とは民友記者発明の文字にして只だ改進黨自由主義と異名同義の新標幟に過ぎざる乎。土百姓主義の謂ひ乎。勤儉主義の謂ひ乎。只だ非貴族的主義と消極的に解す可き乎。然らば積極的に如何に解す可き乎。夫れ如此論じ来る時は平民主義は益々漠然としてとりとめなきに至らんとなす。然り實際漠然なるか故なり。

決して揶揄しているわけではない。この気のいい青年は本当に困惑の体なのである。その証拠に、△平民主義を論ぜざる以上は民友記者を論ずる能はざれば∨というわけ^③で、独歩は、△漠然たりと雖……漠然を以て甘ずる能はず∨に、△本領∨はつかめぬまでもせめて△或物∨をそこに見出そうと、△平民主義∨という言葉に取り組んでゆく

のである。ところが、そのようにして見出した△或物▽を、独歩は△『基督教的道念の活火』と名けんと欲す▽るが、これも結局△渠が漠然たる平民主義の根底には基督教的道念の活火ありとは、吾人が全国民之友より帰納したるに過ぎず。故に茲所こそ民友記者が宣べたる基督教的道念の活火なりと指定するは元来無理なる話なり。民友記者は決して基督教的道念の説教者に非ず▽と、なにやら丸山ゼミの学生が言ったという△とにかくすごいエネルギー▽というのに似てくるのである。

しかし、△全国民之友▽を精査しても△平民主義▽の△本領▽はおろか△或物▽さえも定かには見出すことができなかったというのは、勿論、独歩の不明のせいではない。何かはあるはずだと真剣に捜した独歩には気の毒だが、何も無いところに△或物▽を見出そうとするのがそもそも△元来無理なる話▽なのである。それにしても、独歩が何も無いはずはないと考えたのはいかにも無理もない話だが、その独歩が必死になって見出した△或物▽さえもいつか雲散霧消してしまったその場所に、今日の研究者がたやすく△本領▽を発見して疑われないというのも、これまたいかにも奇妙な話ではないだろうか。丸山の、△幕末から自由民権にいたる疾風怒濤の「非常時」がようやく終息しようとするとき、「新日本」の新たな担い手は、もはや東奔西走の志士でも衣は軒に至る壮士でもなく、いわんや

「維新の元勳」でもなく、日常的な生活と生産の場から政治、経済、教育、文化の諸領域に国民的な創造を担当する「自活自営の民」でなければならなかった▽という文章も、松本の、△彼の平民主義は、もともと、従来政治の姿勢が外むき（「外部の必要」）であつたのを、正しく内なる社会の現実と向き合わせ、国家のあり方を「外交の必要」ではなくて、平民の生活社会と結びつけようとするところから出発していた▽という文章も、蘇峰の発言の、ただし全く蘇峰に成り変つての、要約としてはさすがに手際の良いいものであると言っている。しかし、ただそれだけではないか。たとえば、蘇峰には「無名の英雄」と題した次のような文章があるが、この齒の浮くような文章を要約して、△平民主義▽の根本には△無名の英雄▽への愛があつたなどと言つてみたところで、それで何を言ったことになるであらうか。

彼れ浮世を以て舞台とせず、故に自から俳優を学ばざるなり。彼れ功名を好まず、何となれば、功名の好む可きを知らざればなり。彼れ利欲を求めず、何となれば、利欲の求む可きを知らざればなり。彼れ大なる罪を犯さず、何となれば、大なる罪を知らざればなり。惨風苦雨人を悩せども、彼の胸中には、平和の太陽恒に恩光を放てり、何となれば、彼れ上帝に一身を托すればなり。……彼の額は正直なる汗を以て湿ひ、彼の

顔は悠然として天地に対するのみ。……農夫、職工、
 労役者、商人、兵卒、小学教師、老翁、寡婦、孤児
 等、数限りもなき無名の英雄……嗟呼彼等は国の生命
 なり、世の光なり、平和の泉なり、祝福の源なり、社
 会の大恩人なり。世若し英雄を愛するの人あらば、先
 づ此の無名の英雄を愛せよ。⁽³²⁾

牧歌的というにはあまりにも作りごとの、読む方がかえ
 って気恥かしくなるようなこうい文章は、それだけで、
 蘇峰という人物を胡散くさいと見るに十分な材料ではない
 だろうか。しかも、△凡そ最も世の同情を博し易き議論
 は、弱者少者に与みするの議論なり。蘇峰は善く此秘訣を
 知る▽と評した春汀には見ることでできなかった『自伝』
 によって、今日では容易にその読みは裏付けることができ
 るはずなのである。そればかりではない。蘇峰の△平民主
 義▽が、松本の言うのとは逆に、△内なる社会の現実▽や
 △平民の生活社会▽とは全く無縁なところから△出発して
 いた▽ことを知るには、今日ではどれほどの手間もかから
 ないのである。たとえば芝原拓自の作成した次の表を見れ
 ばいい。米価の下落と凶作に苦しめられながら、なお△地
 券面に記載ある丈の地租は必ず上納せざるを得▽ない農
 民の窮状を訴えた篤志家の投書を先に見たが、この表はそ
 の現実の苛酷さを数字で示したものである。⁽³³⁾「無名の英雄」
 が書かれたのは、この表の最終年次にあたる明治二十年の

1882(明治15年)年以降の農民層の零落・債務奴隷化

年次	A 米生産高 千石	B Aに対する 地租比率 %	銀貨10円を代 償する米石数 石	身代限債務(指数)		地租滞納(指数)	
				人数	債務総額	人数	滞納金額
1880	31,434	14.3	1,397	100	100	100	100
1881	29,912	16.1	1,601	79	82	290	366
1882	30,301	19.1	1,783	124	127	808	467
1883	30,562	25.5	2,004	228	276	4,621	4,003
1884	27,131	32.8	2,059	279	368	11,496	4,834
1885	34,042	22.2	1,596	127	224	31,981	3,229
1886	37,191	23.2	1,669	109	142	11,884	2,017
1887	39,991	23.2	2,024	89	171	6,853	885

ことなのである。

「時勢に感あり」の

中で、△君知らずや、

人は魚の如し、暗らき

に棲み、暗らきに迷ふ

て、寒むく、食少なく

世を送る者なり。家な

く、助けなく、暴風暴

雨に悩められ、辛うじ

て五十年の歳月を踏み

越ゆるなり、……吾れ

不幸にして憤慨多し、

何の吾れを怒らすあ

る、何の吾れを苦しむ

るある、吾れ自ら知ら

ざるにあらず、而も言

ひ難きなり、天果して

我が民を左くるか、天

果して吾が民を誣ふ

か、紛々擾々たる世界

の現象を一括し来り、

の現象を一括し来り、

詳かに是を觀察すれば、熱涙の期せずして吾が蒼頰を掩ふ
 者あり、……思へば何にが故に文学家を要する、何にが故

に政治家を要する、……些々たる一代の栄声を求めて咄々何の狭隘なる、汝が前に粉碎す可き悪組織の社界あらずや。……汝が筆を捨てよ、汝がスペンサーの訳書を投げよ、……今日はペダントリイの縦横すべき日にあらざるなり」と述べている透谷の、その△言ひ難き▽憤りの中には、疑いもなく右のような△時勢▽が組み込まれているのを読みとることが出来る。しかし、その△言ひ難き▽憤りをよそに、心安らかに△無名の英雄を愛せよ▽と書くことのできる蘇峰の心の中には、△ペダントリイの縦横す▽るのを柵み止める何物も打ち込まれてはいないのである。

ところで、その蘇峰の、△自活自営の民▽を△自主的に創出しようという旺盛な意欲▽なるものの虚妄性を明確にするために、もうすこし駄目を押ししておくことにしたい。

次の表は、井芹千賀子「熊本に於ける寄生地主制の展開」に掲げられているものを借りた。³⁴この表で地租十円以上の納入者は、地価四百円以上の土地所有者に相当し、熊本の明治十五年から二十二年の田畑平均地価で換算すると、田畑一町四反三畝以上の土地所有者に相当し、地価五円以上十円未満納入者は、田畑七反一畝以上一町四反三畝未満の土地所有者に相当するという。△彼の額は正直なる汗を以て湿ひ、彼の顔は悠然として天地に対するのみ▽という言葉がいかに空々しいものであるか、蘇峰が△平民の生活社会▽についていかに無知であるかは、これを見れば明らか

だと思うが、蘇峰の△意欲▽の虚妄性は、この表の五円以上の地租納入者の層が、ちょうど県会議員の選挙権者の層にあたることを考えれば、より一層明白になるであろう。

この層の激減は、³⁵程度の差こそあれ、この時期全国に見られた現象であるが、こうした地方社会の構造的変化のもつ政治的意味を升味準之輔は、△そうなれば、府県会および府県会議員の足場もまたかわるであろう。つまり、その足場が二重底になるのである。自家の生計に追われ、政治活動の余裕をなくした運動家のなかで、田畑を抵当に入れて奔走していた者は破産に瀕して下底に沈没し、その機会に土地を集積しえた者は上底にくみこまれる。そうなるにしたがつて、府県会は穩健になるのである▽と適確に表現している。³⁶つまり、△日常的な生活と生産の場から政治、経済、教育、文化の諸領域に国民的な創造を担当する「自活自営の民」▽の解体である。自由党解党の前日、明治十七年十月二八日の『郵便報知新聞』の社説は、その間の事情を、△二、三年前ニ在リテハ自家ノ家計ニ余裕アリテ、其勞ト其財トヲ世益ニ抛ツヲ得タルガ故、各自其志ス所ニ由テ或ハ学校ヲ興シテ英才ヲ育シ、或ハ新聞紙ヲ発布シテ思想ヲ流通シ、或ハ集会結合等、頗ル活発ナル氣力ヲ以テ之ヲ企テタリキ。然ルニ今日ニ当リテハ大ニ前日ニ譲レルノ状ナリ。是レ全ク志氣ノ衰ヘタルニアラズ。自家ノ生計ニ追ハレテ心身ニ余地ヲ留メザルヲ以テ、公共ノ事業ヲ經營

地租納入者数の変遷

	地租10円以上 納入者	M.14年を100 としての指数	地租5円以上 納入者	M.14年を100 としての指数
明治	実数		実数	
14年	21,490人	100.0	220,957人	100.0
15"	21,459	99.9	221,061	100.0
16"	26,708	124.3	230,886	104.5
17"	37,637	175.1	91,803	41.5
18"	25,422	118.3	52,778	23.9
19"	23,693	110.3	50,337	22.8
20"	22,374	104.1	47,438	21.5
21"	23,110	107.5	45,886	20.8
22"	24,214	112.7	45,068	20.4
23"	21,512	100.1	42,618	19.3
26"	23,117	107.6	22,244	10.1
27"	23,139	107.7	21,890	10.0
28"	23,074	107.4	21,602	9.8
29"	23,256	108.2	22,678	10.3
30"	23,249	108.2	22,065	10.0
31"	23,001	107.0	22,357	10.1
32"	24,769	115.3	23,505	10.6

(注)「熊本県農業統計」

スルノ暇ナキニ由云々Vと語っている⁽³⁷⁾。駄足になるが、再び△心身ニ余地Vをとりもどす時がいつに来なかつたことは、左の表によって十分知ることができらるであらう。

おわりに

『国民之友』第一号の「嗟呼国民之友生れたり」の中に次のような文章がある。「明治国家の思想」はこれを、最初に見た『将来之日本』からの引用文と並べて、△政府の上からの欧化主義Vに対して△下からの欧化主義Vを主張する蘇峰の立場を示すものとしてあげているが、ここでは、これによって蘇峰における△言葉の氾濫Vぶりを見ておくことにしたい⁽³⁸⁾。

衣服の改良何かある、食物の改良何かある、家屋の改良何かある、金モールの大礼服は馬上の武士を装うて意気揚々たれども、普通の人民は「スコット」地の洋服すら穿つこと能はず。貴紳の踏舞には柳絮の春風に舞ふが如く、胡蝶の花面に飛ぶが如く、得意の才子佳人達は冬夜の明け易きを恨む可しと雖も、普通の人民は日曜日⁽³⁹⁾に於てすら、妻子と笑ひ語りて其の樂を共にする能はず。煉瓦の高楼は雲に聳え、暖炉の蒸気体に快くして、骨を刺すの苦痛なほ春かと疑はれ、電気燈の光は晃々として、暗夜尚ほ昼を欺き、羊肉肥て案に堆く、葡萄酒酌んで杯に凸きの時に於ては、亦た人生憂苦の何物たるかを忘却す可しと雖も、我が普通の人民は、寂寥たる孤村茅屋の裡、破窓の下、孤燈影薄

く、炬下炭冷かに二三の父老相對して濁酒を傾るに過ぎず。

丸山は、二つの引用文を示した上で、△こういうふうには、要するに当時の上からの欧化主義というものは、実は政府の中における保守的な要素に塗つたところのメッキに他ならなかつた▽と述べているが、△下からの欧化主義▽も、実は△メッキ▽に外ならなかつたのである。その△メッキ▽の剥げ落ちてゆく有様を見ていく余裕も興味ももはや残ってはいないが、概要は次の文章によって知ることができらるであろう。遼東還付以後の蘇峰の言説について松本は述べている。

ここでは、かつて「もし国を愛せんと欲せば、家をも身をも顧るなかれといはば、何人もその国を愛する事は能はざるべし」(「建白書を出したる後は如何にすべきや」一八八七年)とのべて志士的政治論に手きびしい批判をあびせた平民主義者蘇峰の面影はすでになく、「吾人は己れの衣食に汲汲として、国家の大事を顧みざる徒よりも、むしろ己れの衣食を棄てて国務に尽瘁するの志士を愛す」(「質素の生活、高尚の理想」『国民之友』一八九五年)と、滅私奉公型の愛国心が「日本国民の特性」として強調され、また日本の勝利は「欧州の文明の智識をば東洋の野蛮の元氣もて自在に運用したる」ことにあつたと、「野蛮の利」が誇ら

しげに語られている。

あまりにも現実的な「実力」の礼賛。十年前、自由・平等・平和を基調とする「泰西文明」の精神を唱えて論壇に登場した彼に拍手を送つた人々は、変わりはてたこの姿に失望した。⁽³⁹⁾

初期の蘇峰に△拍手を送つた人々▽の存在は、蘇峰論の最後に残された大きな謎であると言わなければならぬが、蘇峰が右のように△変わりはてた▽こと自体には、もはや何の不思議もないと言ふべきであろう。△十年前、自由・平等・平和を基調とする「泰西文明」の精神を唱えて論壇に登場した▽時の蘇峰は、たとえばみれば、竜宮城から帰つてきたばかりの浦島太郎のようなものだったのであり、蘇峰の場合には、ただ、玉手箱を開けるのが迂濶にも少し遅きに失したというだけのことなのである。

最後に、透谷の「泣かん乎笑はん乎」の一節をここに紹介してこの稿を終えることにしたい。むなしさを押えながら蘇峰とのつきあいをここまで続けてきたのも、ひとつには次のように語る透谷の位置に少しでも光をあてることのできればと考へてのことだったのである。

人は流石に正直なり。欺けども詐れども其声の高く天に聞ゆる者を聴けば、泣く可き時に笑はず、笑ふ可き時に泣かず、其天真の照々として見る可き者あるを欽す。

過ぐる数歳は鬱憂多く、諸民楽しむ者少なかりし、国会の春は遅漫なりしとて泣き、文運は痛く拙なしとて泣き、商工の事業は睡眠して起きずとて泣けりき、……然れども、……昨日汝に待たれし議会は今日汝を待つ、……汝が無聊を消さん為めに選挙あり、地方制度の忙事あり、若くは東都百万の人士を喜ばす可き新劇場の建てられしあり、……人は流石に正直なるかな、昨は憂ひ、且つ泣き、今は歌ひ、且つ笑ふ。然れども世人は容易すく泣き、容易すく笑ふ、此間に世と共に泣かず、世と共に笑はずして、冥暗の中に勢源を握攫する者あらば国の至幸なり、……われ世の歡笑するを見て、始めは是れを祝せり。然れども思ひ稍や深く、而して心再び迷へり、嗚呼歡笑するかな、人の無邪氣掬す可し、然れども汝が傍らに無数の欺罔者待ち、万様の藪医術行はれ、而して眼界の稍や春色に接するを見て飛舞措く所なきは、悲しいかな。行いてゴールドスマスの荒村の詩を読め、老者手の衰へても寄る可きなく、独り残されしが故に止むなく小河が衣る苔菜を摘み、棘中より薪料を集めて、僅に今夕の食を得るが如きは、豈に詩人の想像の中にのみ止まらんや。公伯の益す昌えて農民の日に凋衰するを見ずや、

注

(1) 同様のことは同志社時代に関する次の総括的文章についても指摘できる。

予は同志社に於て、基督教よりも、寧ろ其の伝道心を授けられた。而して此の伝道心は、今も尚当年の情熱を剩してゐる。六十三歳の首に著作して、之を天下に公布したる『国民小訓』も、十四歳の大晦日の夜、奈良の市中に配布したる『真の神を知るの近道』も、其物は異るも、其の伝道の精神は同一である。

高踏や、独善は予の望みでない。能はずと雖も、志は兼済に存する。

まるでスーパーマーケットの老経営者が子供の時分に納豆を売り歩いた話を吹聴しているような塩梅なのである。

(2) 「明治国家の思想」(昭和二十一年十月)『戦中と戦後の間』傍点は丸山。表記法も丸山に従う。

(3) 「自由民権運動史」(昭和二十三年四月)前掲書。

(4) 『自伝』は明治二十七年の秋の初めより、二十八年の春の終りに至る迄、予の広島に於ける生活は、予の一生の中で、最も愉快なる時期の一つであつた \checkmark と述べている。蘇峰はこの時『国民新聞』の広島出張所に \wedge 乱暴本部 \checkmark という綽名をつけるはしやぎようであつた。

(5) このカッコ内は全文傍点つきだが省略した。

(6) 『官民調和論』(明治十六年十一月)

(7) 「豪農民権への展開——徳富蘇峰の思想形成」『新編明治精神史』(昭和四十八年十月)

(8) 『職業としての政治』脇圭平訳

(9) 『自伝』によれば、蘇峰は最初の板垣訪問の際にはその直前に福沢諭吉を訪れて、 \wedge 出会ひ頭に、『先生は学者として世に立たれる積り乎、政治家として世に立たれる積り乎。学者ならば千古の真理を探明するが目的であり、政治

家ならば当今の務に応ずるが当然であらうが、先生の所論は何れとも予には判断しかねる」と云つた。Vという。しかも、蘇峰はこのことを板垣に話しているというから念が入っている。

(10) 「将来之日本」(徳富猪一郎氏著) (明治二十年八月) 『陸羯南全集』第九卷

(11) 原文は全文傍丸つきだが省略した。

(12) 「三新聞記者」(明治二十九年三月) 『明治文学全集』34 『徳富蘇峰集』

(13) 『将来之日本』の「緒言」には「若シ余カ議論ノ不完全ナルアラハ願クハ怪ム勿レ。余カ此ノ冊子ヲ稿スルヤ。寂寞幽僻ノ地ニ於テシ。諮詢ノ友ニ少ク。参考ノ書ニ乏シ。殊ニ唯タ零碎ノ時間ヲ節シテ。一ヶ月ニ足ラサルノ間ニ之ヲ成就シタレハナリ」とあつて、『自伝』の記述とはとくに執筆期間の点で大きく異なっているが、これは『自伝』の方を信用すべきであらう。

(14) 「時勢に感あり」(明治二十三年三月) 『透谷全集』第一卷

(15) 「非厭世」(明治二十五年九月) 『静思余録』

(16) 「大日本膨脹論」(序)

(17) 「哀願書」(明治十七・八年頃)及び「石坂ミナ宛書簡」(明治二十年八月) 『透谷全集』第三卷

(18) 『東京経済雑誌』(明治十八年四月) (大濱徹也「民権期の地方と中央」『歴史公論』(昭和五六年九月)に引用)

(19) 『官民調和論』

(20) 『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』(明治十七年一月)

(21) 「解題」(昭和四九年三月) 『徳富蘇峰集』

(22) 「日本の思想」(昭和三二年十一月) 『日本の思想』

(23) 「三新聞記者」 原文は全文傍丸つきだが省略した。

(24) 「徳富猪一郎氏」(明治三十年十一月) 『徳富蘇峰集』

(25) 「思想上の『国民之友』」『国民之友』明治文献版第一卷(昭和四一年九月)

(26) 『新聞集成明治編年史』第六卷

(27) 「哀願書」

(28) 前掲大濱論文に引用。

(29) 原文は全文傍丸つきだが省略した。次の引用文も同じ。

(30) 「平民主義の思想像——徳島蘇峰」『明治精神の構造』(昭和五六年三月)

(31) 「民友記者徳富猪一郎氏」『徳富蘇峰集』

(32) 「無名の英雄」(明治二十年六月) 『静思余録』

(33) 日本近代化の世界史的位置——その方法論的研究(昭和五六年八月)

なお、祖税滞納者に対する強制処分については、たとえば明治十八年に、わずか二万六四二三四円の滞納に対してその五十倍にあたる法定地価一三四万円の土地八九三三町(うち耕地四七六五町)が処分の対象にされ、うち五九〇三町が滞納額の十三倍、地価に対し二五%に相当する三四万円で公売され、なお二二一六町の土地が官没となったという数字によってその理不尽さが知られるであらう。(梅野福寿「松方財政と地主制の形成」『岩波講座日本歴史』15(昭和五一年一月))

農民の土地喪失の結果は、明治六年に二七・四%と推定される小作地率が、十六、七年に三五・九%、二十年に三九・五%に拡大するという数字となって現れている。とくに十六・七年から二十年にいたる間は増加テンポが、多くの府県で、明治期を通じて最も急で、地主的土地所有が最も急激に拡大した時期とされる。(同前)

(34) 『熊本史学』(昭和四七年十月)

(35) 全国について見れば、府県会議員選挙権者の数は明治十四年から二十三年までの十年間に三十%減り、十円以上の地租納入者である被選挙権者の数は同じ期間に十四%減って

- いる。(安良城盛昭「地主制の展開」『岩波講座日本歴史』
16 (昭和四十二年十二月))
- (36) 『日本政党史論』第二卷 (昭和四一年五月)
- (37) 『日本政党史論』第一卷 (昭和四十年十一月) に引用。
- (38) 引用文は丸山に従う。
- (39) 「徳富蘇峰の時代の流れと言論人」『新版日本の思想家』上 (昭和五十年八月)
- (40) 「泣かん乎笑はん乎」(明治二三年四月)『透谷全集』第一卷